

親鸞仏教センター主任研究員定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅱ期・第6回（通算第13回）

第二章 「ただ念仏」の仏道——「先師口伝」の伝統（2）

第二章 原文・先人訳

蓮如書写本第二章 (ただし段落と番号①～③は加来が便宜的に分けた)	第二章口訳 (安良岡康作『歎異抄全講読』大蔵出版、1990年、71-73頁) (ただし □ 記号と傍線は加来が補った。)
二 一 ①おのゝの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。 ②しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。 ③もししからば、南都・北嶺にもゆゑしき学生たち、おほく座せられてさふらうなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくゝきかるべきなり。 ④親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり。 ⑤念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。 ⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。	(第二章) 一 ①おのおの方が、十以上もの国境〈くにざかい〉を越えて、わが身・わが命を思い返さないで、〔私を〕お尋ねにおいでになりました、〔その〕ご意向は、いちずに、極樂に往生する<u>手だて</u>を問い尋ねようとするためであります ②ところが、念仏より外〈ほか〉に、往生の手だてを心得ており、また、往生のための教えを書いた文章などを知っているであろうと、私に関心を持って知りたいと思ひになつておいでになりますならば、〔それは〕大きなまちがいです。 ③もしそう〔お思い〕ならば、奈良の都や比叡山にも、すばらしい学僧たちが数多くおいでになりますそうですから、<u>それらの人々</u>にもお逢ひ申し上げて、極樂に往生するための大事なことを、念を入れてお尋ねになるのがよいのです。 ④〔この〕親鸞においては、ひたすら念仏をとなえて、阿弥陀如来のお助けをこうむるのがよいという、<u>すぐれた人</u>のお言葉を身に受けて、〔それを〕信ずる以外には、各別の理由はないのです。 ⑤念仏を申すことは、ほんとうに、〔極樂〕浄土に〔往つて〕生れる<u>因〈もと〉</u>なのでございましょうか、あるいは、地獄に墮ちるはずのしわざなのでございましょうか、全然、〔私は〕心得ておりません。

⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはじこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。 ⑧弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。 ⑨仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。 ⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごととならんや。 ⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟。 ⑫詮^{せん}ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。 ⑬このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと {云々}。	⑥〔私としましては、〕たとい、法然聖人におだましをこうむって、念仏したことで地獄に堕ちてしまったとしても、決して後悔するはずはございません。 ⑦そのわけは、〔念仏〕以外の修行に精進・努力して仏に成ることができた<u>私が</u>、念仏を申して、〔そのため、〕地獄にも堕ちますのならば、それこそ、おだましをこうむって堕ちてしまったのだという後悔もございましょうが、しかし、どのような修行にも達し難い私なので、結局のところ、地獄は<u>きっと</u>堕ちてとどまる所なのですぞ。 ⑧弥陀の本願が真実であらせられるならば、釈尊のご説教が<u>偽り言</u>のはずがありません。 ⑨釈尊のご説教が真実であらせられますならば、善導大師の御解釈が<u>偽り言</u>を言われるはずはありません。 ⑩善導の御解釈が真実ならば、法然聖人のお言葉が、どうして<u>偽り言</u>でありましょうか。 ⑪〔その〕法然聖人のお言葉が真実ならば、この親鸞が申します趣旨も、同じように、<u>根拠のないはずは</u>ございませんよ。 ⑫結局のところ、〔この〕愚かな<u>私の</u>信心においては、このようなものです。 ⑬こう申し上げたからには、念仏を採用してお信じ致そうとも、あるいは捨てようとも、皆さん各自のお考え次第です。……
--	--

はじめに

「余〔安藤州一〕、嘗て先生〔清沢満之〕の前に、自己の信念を表白す。先生曰く。爾の信仰は、今後尚ほ一変するの時来る可し。それ信仰は、如何なる理窟に遇ふも、如何なる異説を提示せらるるも、円転滑脱、毫厘も動揺なきの境に至らざれば、真の確立を得難きなり。一方の説を峻拒して、他の一方の説にのみ依頼せる信仰は、恐らくは他日の変動を免れざるべし。余は、エピクテタスの主義に従ふ、しかも他力本願の信仰は動かざるなり。余は、ソタラテスを尊信す、しかも如来の救済を疑はざるなり。余は、キリストの山上の聖訓を喜ぶ、しかも大悲の誓約の誤らざることを信ずと。」

(安藤州一『信仰座談』)

前回のふりかえり

・『歎異抄』の主題である「先師口伝の真信」にとって第二章とはどのように位置づけることができるのか。

・「おのおのの」と呼びかけられた門弟たちが師・親鸞に期待していたこと、念仏の行に期待していたことはどのようなことであったのか。

・「ひとえに往生極楽の道をといきかんがため」という押さえにどのような問題が見出されていたのか。彼らは、師の言葉から何を聞こうとしていたのか。——「法文」と「念仏」。——「法文」と「おおせ」——「ひとえに」から「ただ」へ。——門弟たちの心の至奥に存在する念仏の行を選び取る深い関心へ。

・「南都・北嶺」の「ゆゆしき学生たち」とは、親鸞たちにとってどのような存在として受けとめられていたのか。学生たちの学びがもつ問題とは何か。

「然に諸寺の釈門教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛〈ミヤコ〉都〈ミヤコ〉の儒林〈ゾクガクシヤウ〉行に迷うて邪正の道路を弁うることなし。斯を以て興福寺の学徒……奏達す」

（『教行信証』「後序」『聖典』398頁）

「末法悪世のかなしみは 南都北嶺の仏法者の

興かく僧達力者法師 高位をもてなす名としたり」

（『正像末和讃』「愚禿悲歎述懐」『聖典』509頁）

「已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり。この世の本寺本山のいみじき僧ともうすも法師ともうすも うきことなり。／釈の親鸞之を書く」

（同上『聖典』510頁）

（1）親鸞の表明

④親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

一、「親鸞におきては」

・「親鸞におきては」という語りがもつ実存的主体的な位相。——「親鸞は」「親鸞も」との差異。——「われ」「われら」などの代名詞ではなく「親鸞」という名のりであることの意味。

一、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

・親鸞が信じた「よきひとのおほせ」の本質とはなにか——何でもあった比叡山になかったただ一つのこと。——「ただ」の衝撃。

「ただ後世の事は、よき人にもあしきにも、おなじやうに、しやうじいづべきみちをば、ただ一すぢにおほせられ候しを」（『恵信尼消息』（『浄典全二』一〇三一頁）

このただ一すぢに仰せられていた「しやうじいづべきみち」が、『歎異抄』では「念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という仰せとして伝えられている。

- ・「ただ」とはどのような思想か。

「念仏」という行も「弥陀にたすけられる」という救いもすでに比叡山には存在した。なんでもある比叡山になかったもの、それが「ただ」という選択の精神である。比叡山の仏教は、「あれもこれも」の仏教である。法然の仏教は、「あれかこれか」の仏教である。

山の念仏は「念仏も」

里の念仏は「念仏しか」

法然の念仏は「ただ念仏」

- ・この「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の一句には、「よきひとのおおせをかぶりて信ずる」つまり「先師口伝」の本質がよくあらわされている。「先師口伝」とは「よきひとのおほせ」である。それは一般的に考えられる「口伝」とはまったく異なった質をもった宗教言語活動であった。

- ・「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

└専修念仏

└唯称仏号

- ・「『唯信抄』というは、「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり。」（『聖典』五四七頁）

「唯」は、ただこのことひとつという。

ふたつならぶことをきらうことばなり。

また「唯」は、ひとりというところなり。

「一つには、一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるが故に」

（善導『散善義』『聖典』217頁）

「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無ちのともがらに同して、ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし。」

（『一枚起請文』『聖典』962頁）

- ・「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩（ただよく常に如来の名号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべし、といへり）」

（「正信念仏偈」『聖典』205頁）

- ・「極重悪人唯称仏（極重の悪人は、ただ仏を称すべし）」

（「正信念仏偈」『聖典』207頁）

- ・曾我量深は、「「ただ」とは一向専修である。一向専修とは、定散自力を否定して、ただただ本願に順ずる、順彼仏願故である。人間の理知のはからい一切を捨てて本願念仏に帰する」（『歎異抄聴記』真宗文庫、117頁）と述べている。

- ・金子大栄は、この「ただ」が「念仏して」にかかるのか、「と信じて」にかかるのか、という問いを出している。「ただ念仏のみぞまこと」という言葉が後述にあり、また親鸞の出

遇った法然の教えが専修念仏であったことの決定的な意義を考えると念仏にかかる理解するのが適当であろう。

・「ただ念仏して」とある念仏は、第一章において「念仏もうさんと思ひ立つ心の起こるとき」の念仏である。法然・親鸞にとっては、称名念仏とは、誦文のように口で発音する行為でもなく、また学文して念のこころを理解して唱えることでもなく、本願の名号という言葉となったはたらきをたたえ、その名義にかなうことであり、つまり存在の不思議さを開示する根源語、如来からのよびかけをみずからの身を通して表現することである。

・この一句の「ただ」にこそ親鸞の感動がある。ここに法然が選択本願と呼んだ法蔵菩薩の精神への呼応がある。

一、「とよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」

先師 —— よきひとの
口伝 —— おほせをかぶりて
真信 —— 信ずるほかに別の子細なきなり

・安良岡は「よきひと」について「仏道における、すぐれて立派な人のこと」（安良岡『全講読』77頁）と解し、「具体的には、先師法然上人のことであるから、善知識・知識（「序」に既出）の意味にも解されるが、それは、この語の語義としては拡張し過ぎてはいないかと思われる」（安良岡『全講読』78頁）と指摘しているが、上記した対応で考えてみたい。

・「よきひとのおほせを信ずる」のではなく、「よきひとのおほせをかぶりて信ずる」と表現されるような質をもつ経験。そこには、西田幾多郎の对象的論理と場所的論理との差異を参照にすることができるかもしれない。

・「ただ」という表現の背景。

「ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。〔中略〕一文不知の愚どんの身になして、尼入道の無ちのともがらに同して、ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし。」

（『一枚起請文』『聖典』962頁）

「「唯信抄」というのは、「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり。「信」は、うたがいなきところなり。すなわちこれ真実の信心なり。虚仮はなれたるところなり。「虚」は、むなしという。「仮」は、かりなるということなり。「虚」は、実ならぬをいう。「仮」は、真ならぬをいうなり。本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」という。」

（『唯信鈔文意』『聖典』547頁）

・『恵信尼消息』における「ただ」の用例（既出）。

(2) 地獄一定の自覚

⑤念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。

・「浄土にむまるるたね」と「地獄におつべき業」という対比が示す問題点。——なぜ極楽や地獄、浄土と穢土という対比ではないのか。——門弟たちの関心「ひとえに往生極楽の道といきかん」との対応。

・「ただ念仏」という行が付与する人生——「地獄からの自由」か、「地獄への自由」か。

・「罪福を信ずる心」——幸福になりたい人は幸福にはなれない。幸不幸という価値観は無上尊を実現できない。

・この「まことに」は、次段の「まこと」の伝統に展開する。

一、「総じてもて存知せざるなり。」

・「存知」という知り方——「存知」の対義語は？——「善惡の二つ総じてもて存知せず〔中略〕ただ念仏のみぞまことにておわします」（『歎異抄』後述）

⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。

・「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう」ではない。

・「「たとひ」は、下に「とも」「ども」を伴う時は、かりに、よしやの意」（『全講読』79頁）「さらに」は、副詞で、下に打消の語（ここでは「ず」）が来る時には、全然、全く、決して、少しも、の意となる。（同上）

一、「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう」

・なぜ「念仏」すると「地獄におちたりとも」まったく後悔するはずがないのか。

・地獄に墮ちても後悔しないという自覚の根底に存在する根源的共同性

「仮令（たとい）、身を 諸（もろもろ）の苦毒の中に止（お）くとも、我、行ずること精進にして、（我が行は精進にして）忍んで終（つい）に悔（く）いざらん。」

（『大無量寿経』嘆仏偈『聖典』頁）

「わたくしは、阿鼻〔地獄〕に行つて常に住しようとも、誓願の力を決してひるがえさないであろう。」（サンスクリット本）

「阿鼻の苦の衆生を度し尽くすとも 発す所の弘誓は永（とこし）えに断えざらん」

（『莊嚴経』）

「（大王、仏に白さく）……「伊蘭子」は、我が身これなり。「梅檀樹」は、すなわち我が心、無根の信なり。…「世尊、もし我審かによく衆生のもろもろの悪心を破壊せ

ば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もって苦とせず。」その時に摩伽陀国の無量の人民、ことごとく阿耨多羅三藐三菩提心を発しき。」

(『教行信証』信卷引用『涅槃經』『聖典』265 頁)

⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身《み》が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

・二つの「身」

「自余の行もはげみて仏になりべかりける身」→「さふらはばこそ」→「後悔もさふらはめ」

「いづれの行もおよびがたき身」→「なれば」→「地獄は一定すみかぞかし」

一、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

・この「いづれの行もおよびがたき身」という自覚は、個人的なものか、全人的なものか。たとえば、次の第三章の「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまひて」という言葉などとの関係。個人の最も深い有限性の自覚が、すべての他者の連帯を可能にする地平を開く。

・「一定すみかぞかし」——「一定」と「決定」——「ぞ」と「かし」で、注意を促し、念を押す気持ちを表し、「相まって、なのですぞ、の意味となる」(『全講読』81 頁)

【参考】

「されば、われとして浄土へまいるべしとも、また地獄へゆくべしとも、さだむべからず。故聖人黒谷源空聖人の御ことばなり の仰せに、「源空があらんところへゆかんとおもわるべし」と、たしかにうけたまわりしうへは、たとい地獄なりとも、故聖人のわたらせたまうところへまいるべしとおもうなり。〔中略〕たとい、弥陀の仏智に帰して念仏するが地獄の業たるを、いつわりて往生浄土の業因ぞと、聖人さずけたまうにすかされまいらせて、われ地獄におつというとも、更にくやしむおもいあるべからず。そのゆえは明師にあいたてまつらでやみなましかば、決定、悪道へゆくべかりつる身なるがゆえに、となり。しかるに、善知識にすかされたてまつりて悪道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さればただ地獄なりというとも故聖人のわたらせたまうところへまいらんと、おもいかためたれば、善悪の生所、わたくしのさだむるところにあらずというなりと。これ自力をすてて他力に帰するすがたなり。」

(『執持鈔』『聖典』643－644 頁)